

トライライターズ リーディング公演「恋と話した」

『ペインフル・スマイル』

作…ササキ タツオ

■概要

「君の笑顔は罪深い」と言った彼女の事。
僕は絶対に忘れない。

これは、僕と彼女をめぐる青春と追憶の物語。

■人物

青山省吾（16） 高校1年生。

谷口茜（16） 高校1年生。

■本編「ペインフル・スマイル」

何もない舞台。

床にはメガネが置いてある。

青山省吾（16）と谷口茜（16）がそれぞれ現れて、

そして、物語が始まる……。

《プロローグ》

青山のMO「彼女にどんな言葉を送れば正解だったのだろう……。永遠に答えの出ない謎の中で僕は迷子になっていた……」

茜「君の笑顔は罪深い」

青山のMO「そんなこと、言われたこと、なかった……」

茜のMO「彼のこと、突き放すしかなかった。そんな私をどうか許してほしい……」

《春》

青山のMO「彼女と出会ったのは……一年前……高1の春の終わり、葉桜が緑色を強くしている頃のことだ。高校生活になじめなかった僕は、率先して一人でいられる口実を探していた。その一つがゴミ捨て当番に手をあげる事だった」

茜のMO「集合ゴミ捨て場で、私はメガネを探していた。私の何がいけないのかわからない。だけど。クラスの女子たちはみんな私をこの世界から排除しようとしていた。私のメガネをゴミとして捨てるゲームが彼女たちのお気に入りだ」

青山のMO「初めて彼女を見た時、彼女はゴミ袋の山の中で途方に暮れていた。僕はそんな彼女を無視して通り過ぎることができた。でも、できなかった。彼女は、確かに涙を流していたから……」

青山「あの……!」

青山のMO「彼女は僕の存在に気づいて、慌てて顔を背けて涙を拭った」

茜「なんですか……」

青山「いや……その……こんなところで……何を……?」

茜「別に……なんでもありません」

青山のMO「そう言って彼女はゴミの山の中から出てきた」

青山「でも……」

茜「なんでもありません」

青山「何か探して……」

茜「放っておいてください」

青山「……気に障ったなら、すみません」

茜「……メガネ」

青山「え？」

茜「メガネ、探していたんです。そういうゲームなんです」

青山「ゲームって……え？　ここに？」

茜「そうです」

青山「そうです……って」

茜「そうなんです」

青山「だって……ここ……ゴミ捨て場……」

茜「もう、いいんです。諦めました。私の負けです。ゲームオーバーです」

沈黙。

茜「すみません。いまの全部嘘です。忘れてください」

青山のMO「彼女はそう言ったけど、その表情が嘘を言っているようには思えなかった。だから、僕は……」

青山「探しましょう！」

茜のMO「この男子、どうかしている。彼は、ゴミ袋の山に分け入って、私のメガネを探し始めた……」

青山「メガネ。どんなの？ 特徴とか」

茜「だから、それは……嘘だって……」

青山「見つける！」

茜「……嘘だって言いましたよね？」

青山「見つけるから！」

茜「……わかりました。……一人で探します。だから、構わないでください」

青山「嘘じゃなかった」

茜「あなた、バカなんですか？」

青山「バカなのかもしれません」

茜のMO「そうやってこの男子は、黙々と私のメガネを探し続けた。だから、私も、もう一度、探すことにした」

青山のMO「僕たちは日が暮れるまで一緒にメガネを探した。でも、結局は見つからなかった……」

青山「見つけられませんでした……」

茜「迷惑かけて、すみません」

青山「そんなことないです。また明日探しましょう」

茜「もういいです」

青山「でも……」

茜「大丈夫なんで」

青山「あの……。もし、僕でよかったら、力になります……！」

茜「……あなたでは無理です」

青山「……でも」

茜「気安く、力になるなんて言わないでください。私は一人で大丈夫です。でも。探してくれて、ありがとう」

青山のMO「彼女は、そう言って、微笑んだ。ガラス細工のような繊細で、今にも壊れてしまいそうな、そんな彼女の笑顔を前にして、僕は、返す言葉を見つけられなかった。それが悔しかった。だから、僕は、彼女と別れた後、もう一度集合ゴミ捨て場に戻った。絶対、見つける」

青山、舞台に置いてあるメガネを拾う。

茜のMO「信じられないことが起こった。翌日、あの男子が、捨てられた私のメガネを持って教室に現れた」

青山「これ、届けにきました。見つけたんで」

茜のMO「教室が一瞬で静まり返った。この男子はよっぽど鈍感なのか、周囲の空気の変化に全く気が付いていない。私は思わず、彼を教室の外へ連れ出した」

青山のMO「彼女の反応は期待していたものとは違っていた。僕は困惑した」

青山「メガネ、これですよね……?」

茜「そうですけど……。やめてください」

青山「え? どうしてですか?」

茜「あなた、バカです。私、あなたに頼みましたか？ 頼んでませんよね？」

青山「それはそうですけど……」

茜「余計なことしないでください」

青山「すみません。でも、見つかったら、何か変わるかもって、思ったから……」

青山、メガネを茜に渡す。

茜のMO「彼は、私にメガネを返すと去って行った」

茜、メガネをかける。

青山のMO「それから、僕たちは、高校で、すれ違うたびに、視線を合わせ、一回逸らして、それからもう一度、横目でみて、確認し合う。そんな奇妙な関係になった」

茜のMO「クラスが違う彼とは決して話すわけではなかった。でも、彼と視線が合って、視線を逸らし、もう一度確認すると、彼もこつちを確認していて、また目が合って……そんなことが積み重なっていった」

青山のMO「僕らはどこか似ていた。学校には馴染めない。クラスから浮いた存在で。居場所もなくて。休み時間は意味もなくて、廊下を歩き回る。僕らはよく廊下ですれ違った」

茜のMO「彼は変わっていた。廊下ですれ違うたびに、視線を逸らしたかと思うと、ふと笑顔を向けて来るようになった。私にはそれが謎で。理解できなかった」

青山のMO「彼女とまた話がしたい。でも、改めて彼女の前に立つと、うまく自分の気持ちを言葉にできそうになくて。だから、偶然という口実を探していた。そのうちに、日々は過ぎていった……」

《夏》

茜のMO「次に彼と話す機会が訪れたのは、夏の期末テストが終わった頃……」

青山のMO「その日、図書室で本を選んでいた僕は、片隅で読書している彼女を見つけた」

青山「あの……。こんにちは」

茜「……こんにちは」

青山のMO「彼女はちらつとこちらをみて、また本に視線を戻した。僕は彼女の向かいに座った」

青山「お元気、でしたか？」

青山のMO「何気なく本を読むふりしながら、彼女に話しかけた」

茜「それなりに。あなたは？」

青山「僕も。それなりに。でも。なんか。よかったです……」

茜「なにがです？」

青山「あれから、ゴミ捨て場で会わないから」

茜「そうですね……」

青山「もう大丈夫なんですか？」

茜「そうですね……」

青山「あの……」

茜「はい……」

青山「その……。もしよかったら……。今日、いつしよに帰りませんか……？」

茜のMO「彼の唐突な言葉に、私の頭はフリーズした」

青山のMO「彼女とは帰り道の方向が途中まで一緒に。徒歩通学の僕と自転車通学の彼女はしばらく一緒に並んで歩いた。でも、よくわからない緊張感が流れていて、長い沈黙が僕たちを包んでいた」

茜のMO「何から話したらいいのか、その糸口になる言葉が見つからなかった。だから私は……」

茜「しりとり、しませんか!？」

青山「しりとり、ですか……?」

茜のMO「彼は戸惑っていた。私も自分があまりにもバカな事を言ってしまったような気がした……」

茜「それも、日本地名しりとり、です!」

青山「え? できるんですか?」

茜「ほっかいどう!」

青山「う……うつのみや?」

茜「や……山口!」

青山「ち……千葉」

茜「ば……ば? ば? やっぱりダメだ。難しい。ちょっと子供っぽかったかな」

青山のMO「そう言って、彼女は笑った。屈託なく、心からの笑顔だった」

茜のMO「なんだか久しぶりに笑った気がする。なんだろう、この感じ。私、変だ……」

青山のMO「その笑顔に、僕は引き寄せられるように、勇気を振り絞って、彼女に、連絡先を聞いた」

茜のMO「世界に絶望していた私にとって、彼は光に満ちていて、私に希望をくれる。そんな風に見えた……。やっぱり私、変だ」

青山のMO「そして連絡先を交換した僕たちの短いメッセージのやりとりが始まった!」

茜「はじめまして。谷口茜です」

青山「はじめまして。青山省吾です」

茜「この前の続き、しませんか?」

青山「え? もしかして、しりとり?」

茜「り。理解がはやい」

青山「い。一応……」

茜「う。うまい」

青山「い。いいのかな？」

茜「な。ナイス！」

青山「す。すごい」

茜「い。いいね！ 会話なら続くね！」

青山のMO「しりとりも悪くない。メッセージの向こう側に彼女の笑顔が見える気がした……」

茜「こんばんは」

青山「は。はい。こんばんは」

茜「は。【は】で返すのって難しい。ずるい」

青山「い。言われてみれば、確かに。結構、難しい」

茜「い。色々試してみよう」

青山「う。うんと言葉を選んで考えるようにするよ」

茜「よ。よく考えてください」

青山のMO「僕たちは日々を言葉で重ねていった」

青山「学校、途中でサボった」

茜「た。たまにはいいよ。私も休んだ」

青山「だ。だからか、会えなかった」

茜「た。退屈だ」

青山「だ。大丈夫？」

茜「ぶ。ぶるぶる！」

青山「る！？ る！？ る！？」

青山のMO「僕の返信の先で彼女が笑っている気がした。こうして、しりとりが僕たちのメッセージのルールになっていった」

茜「青山くんは本は何が好きですか？」

青山「か。海外ミステリーが好きかな」

茜「な。なるほどー。私、あんまり読んだことないんだけど。おススメは？」

青山「は。はじめて読むなら、アガサクリステイとかコナン Doyle かって人もいるけど。好みかな」

茜「な。謎って難しい？ 私、頭良くないけど、楽しめるかな？」

青山「な。謎も物語の要素の一つだけど、人物の特徴だったり、会話のユーモアだったり。そう言うところも面白いと思うよ」

茜「よ。読んでみるね。意外と会話なら、長くなるけど、しりとり、続けられるね！」

青山のMO「彼女はメッセージの中では意外とお喋りで。気軽に話してくれることが嬉しくて。僕も一緒に話してしまつて。

気づいたら、僕は彼女へ【好き】の2文字を書いたのは消してを繰り返すようになっていた」

青山「ね。熱帯夜が続くのは辛いよ」

茜「よ。よし。アイスを食べよう」

青山「う。うまい！ アイス食べた」

茜「た。楽しい時間って辛い時と違って、あつという間に過ぎていくような気がします」

青山「す。素敵な時間ってことだ」

茜「だ。誰かと話すのが楽しいなんて思ったことなかったです」

青山「す！ 少し照れるな！」

茜「な。なぜです？」

青山のMO『す』……もう限界だ。夏休みの終わり。僕は思い切って、彼女への想いを送信した」

青山「す。好きだ！」

青山のMO「送ってしまった。とうとう送ってしまった！ 僕は、自分でも訳が分からなくなっていた……。彼女から数時間して返信が来た」

茜「だ。ダメだ、君が一体何を言っているのか、私には理解できません。君とは一度、ちゃんと話し合わないといけないね」

青山のMO「話し合い？ それがどういう意味なのか。僕にはわからなかった。その日を境に彼女からの連絡は途絶えた」

茜のMO「彼の言葉は、私を追い込んだ。彼の優しさを感じる事が痛かった。幸せな気持ちになることがいけないことだと
思った。……私は幸せになってはいけない」

《秋》

青山のMO「2学期になって。彼女からは相変わらず連絡もなくて。学校ですれ違うこともなくなっていた」

茜のMO「彼と話がしたい。そう思ったけれど。そうできない事情が発生していた。これは私自身の問題だ。いじめが暗い影を落としていた」

青山のMO「僕は彼女に避けられていると思った。だから、自分から会いに行くことができなかった。彼女から拒否されるのが怖かった……」

茜のMO「私の問題に彼を巻き込みたくはなかった。……でも避け続ける事には無理があった。だから、私は決意を固めた」

茜「青山君。図書室で待ってる」

青山のMO「彼女からの突然のメッセージにどれだけ喜びを感じたことだろう。僕は待ち合わせの図書室へ向かった。彼女はいつもの席でいつもと変わらぬ様子で、本を読んで僕の事を待っていた」

青山「久しぶり」

茜「久しぶり」

青山のMO「僕はいつものように彼女の向かいに座った」

茜「読んだよ。青山君のおすすめのミステリー。ホームズにポアロにミスマーブル」

青山のMO「彼女は肝心の話題を慎重に避けているようであった。だから僕もあえてたずねはしなかった」

青山「どれがよかった？」

茜「そうだな。私はワトソンが可愛いと思った。君みたい」

青山「え？ 探偵じゃなくて助手の方？ っていうか、僕みたいって……」

茜「平凡な男子って感じ」

青山「ひどいな。これでも観察力には自信あるけど」

茜「じゃあ、私はどう見える？」

青山「それは表現するの、難しい」

茜「やっぱり君はワトソンだね」

青山「なんだか悔しい」

茜「でも、ホームズみたいな破滅的な人間には、そういう信頼できる普通な人間がいてこそ、バランスっていうか、関係が成り立つのかな、なんて」

青山「そういう視点もあるか」

茜「すぐく私と君みたいに思えた」

青山「君がホームズっていうのは、なんだかズルいな」

青山のMO「僕たちは図書室で本を読み、日が暮れて、一緒に帰った。彼女の横顔が夕焼けに染まっていた」

茜「青山君……。君の笑顔は罪深い」

青山「え……？」

茜「私、青山君に助けられたり、突き落とされたり。なんか。苦しい……」

青山「突き落としたりなんて……」

茜「それが私の気持ち。なんか、君が近くにいると駄目なんだ、駄目なんだ、私たち」

青山「どういうこと？」

茜「うまく説明できなくて、ごめん……」

青山、立ち止まり、うつむく。

茜、2、3歩前へ行き、振り返る。

茜、青山へ駆け寄る。

茜、青山の袖をつかむ。青山、うつむいたまま。

茜もうつむく。

茜「ごめんなさい。さようなら……」

茜、走り去る。

青山、ハツとして、袖を見て、茜の走り去っていった方を見る。

青山「……」

青山のMO「彼女はそう言って、自転車に乗って、去って行った」

茜のMO「彼を突き放す。それしか、私には自分の感情を、自分自身を維持する方法が見つからなかった。私は彼の優しさを拒否することしかできない、自分の弱さに泣いた……」

青山のMO「僕はその場に立ち尽くした。この胸に残るあたたかさは、彼女の体温なのか、夕焼けの眩しさなのか、僕の心は混乱していた」

茜のMO「彼の笑顔は私の心に刺さる。それが嬉しくて、腹立たくて、嫌で、邪魔で、愛おしかった……」

青山のMO「この日から彼女は学校に来なくなった。彼女へのいじめがエスカレートしていた事を知った。僕は、自分が何も知らなかったこと、何もできなかったことを突きつけられた。悔しくて。情けなかった」

茜「ごめんなさい。さようなら……」

青山のMO「あの時の、彼女の言葉の本当の意味をちゃんと理解できていたら。彼女の抱えていたものに気づいていたら。何か違ったのかもしれない。でも、今からでも遅くない！彼女の事を自分なら救える。そう思った。でも、実際は何をしたらいいいのか。何もできない自分がいた……僕は僕に絶望した……」

茜のMO「彼の世界には私はいない方がいい。彼の言葉は私の心を動かす。彼の笑顔は私の心を動かす。だから、余計に辛かった……」

《冬》

青山のMO「彼女とすれ違ったまま、本格的な冬がやってきた。僕は彼女に言葉を送り続けた。またつながれる瞬間があると信じて……。でも彼女から返事が来ることはなかった……」

茜のMO「彼の言葉を読む。彼の優しさに触れる。彼の想いを感じる……。だけど。それが余計に苦しかった。限界だった。もう終わりにしたかった」

茜「青山君。図書室で待ってる」

青山のMO「彼女からのメッセージに、僕は、図書室へ向かった」

茜のMO「図書室に現れた彼は、いつもと変わらない、私の心の中にいる、彼だった」

青山のMO「彼女は僕が想像した通り、いつもの席でいつものように本を読んでいた」

茜「君は、私の言ったこと、全然、理解できてないみたいだね」

青山「理解できるわけない」

茜「そうだよ……。私と君は本質的に違う人間。だから、近づいたらいけないんだよ」

青山「そんな理屈、よくわからないよ……」

青山のMO「僕は言葉に詰まった。すると彼女はそっと鞆から手紙を取り出して僕に差し出した」

茜、青山にそつと手紙を渡す。

青山、戸惑いつつ、受け取る。

青山「え？ これ……」

茜「君に宛てて書いたの。あとで読んで。私の気持ち。あとで。一人で。読んで」

青山「で。でも。そんな……君だけ、ずるい」

茜「いいから。私、思ってること、口に出すの下手だから。ごめんね……」

青山のMO「そして、僕たちは一言も話さず、一緒に帰り道を歩いた。木枯らしが僕らの間を切り裂いていくように吹いていた」

青山「地名しりとり！」

茜「え？」

青山「おきなわ！」

茜「わ、わ……わかんないよ」

青山「よ。よ。よ……」

茜「ごめん……。そういう気分じゃない」

青山「僕の方こそ、ごめん……」

茜「青山君は優しいね。でもその優しさは。その笑顔と一緒に、罪深い。青山君じゃ、私の事、受け止められないと思う」

青山「待ってる……」

茜「そんなこと言わないで」

青山「待ってるから！ また図書室で」

茜「本当に、君はバカ……」

青山「僕はバカだよ。平凡だし、ワトソンだし……でも……待ってる！」

茜「……また、今度、しりとりしようね！」

青山のMO「彼女はそう言うと、自転車に乗って、去って行った。彼女は、僕の事を忘れたわけでも、嫌いになったわけでもなかった。そのことがわかっただけで。いいのかもしれない、と、僕は思った」

茜のMO「私は彼に嘘をついた。もう会えないこと。言わなきゃいけなかった。それなのに、嘘はつきたくはなかったのに。でも、その嘘が本当の私の気持ちだった」

青山のMO「白い吐息を漏らしながら微笑んでいた彼女を、そっと抱きしめることができたなら……。でも僕にはできなかった。できなかつたんだ」

茜「また、今度、しりとりしようね！」

青山のMO「翌日。彼女は、僕の世界から消えた。転校ということだった。メールも電話も通じなくなっていた。本当に、いきなり、唐突に、僕の生きる世界から、彼女は姿を消した」

茜からの手紙を見る青山……。

《エピソード・そして再び、春》

茜の手紙「青山君へ。口ではうまく言えないので、この手紙であなたへの想いを綴ります。

私はあなたほど世界を単純に見る事が出来ません。私はどうしても消えてしまいたくなる自分の衝動を抑えきれないことがあります。それがなぜなのか、じぶんでもよくわかりません。もしかしたら、現実に踏みとどまっていられる理由をあなたにすることができたら、私はその衝動を止められるのかもしれないと思ったこともあります。

でも、そんなことをしたら、きつとあなたを苦しめることになってしまう。そんなこと私にはできません。自分のために、あなたを犠牲にするようなことはできません。

だから私は、あなたから、そしてこの世界から離れることにしました。

離れば離れるほど、私はあなたを近くに感じます。どうかそんな私のことを理解してくれると嬉しいです。私があなたの世界から消えてしまっても、どうかその笑顔を絶やさないてください。

私は、本当は、あなたの笑顔に救われていたのです。ありがとう。さようなら」

青山のMO「そして、彼女のいない、春がやってきた。僕は彼女の手紙を何度も読み返した。僕が彼女の気持ちを理解することができていたら。その孤独を、絶望を、わかちあえていたら……」

茜「君の笑顔は罪深い」

青山のMO「図書室で、僕は一人で本を読む。いつもの席にもう彼女はいない。ふと窓の外を見る。みずいろの空には、真っ白な飛行機雲が伸びていた。僕は彼女の言葉を、繰り返して、心で想った。いつの日か、偶然が運命に味方して、彼女と再会できる、そんな日が来たら……僕は全力で、彼女を笑顔にする。絶対に笑顔にする。世界への絶望から彼女を救い出す。そう心に決めた僕は、この気持ちが消えることのないように、大切に保存した」

(おわり)